

# 小学校体育における

## 「スリーラダーコート・サッカー」の実践課題の検討

－意思決定と技能発揮の視点から－

土橋建仁（信州大学）

### 1. 目的

近年、ボール運動系の学習において「易しい教材づくり」が大切にされ、ゴール型のサッカータイプの授業づくりの中で、体育館のフロアで2次元的なボール操作を実現できる「スライドボール」を利用した授業が全国的な広がりを見せている。ただし、易しいボール操作とはいえ、その指導においては教師の適切な指導が欠かせない。そこで本研究では、「ラダーコートサッカー」(岩田、2024)をより易しく修正した「スリーラダーコート・サッカー」の授業を対象に、ゲームでの意思決定と技能発揮の視点から、どのような教師の指導の課題性が生じるのかについて検討することを目的とする。

### 2. 研究方法

1) 対象:長野市立S小学校6年生(男子13名、女子12名、計25名)の9時間単元の授業を対象にする。

2) 分析方法:クラスの中の2チームを抽出し、第5～9時間のゲームをVTR撮影し、「インサイドキック率」、「ダイレクトパス率」、および「縦パス成功率」の検討を試みる。

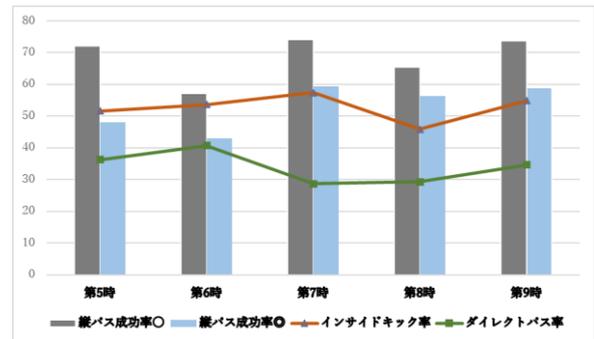
「縦パス成功率」については、さらに「意思決定」と「技能発揮」の視点から分析する。

なお、「スリーラダーコート・サッカー」とは、「ラダーコート・サッカー」をさらに簡易化し、ディフェンスを「ラインディフェンス」のみにし、コート内のゾーンを3分割したものである。

### 3. 結果と考察

分析の結果は右段の図のようであった。

1) 「インサイドキック率」は、単元後半、およそ50%前後で、大きな変化は確認されなかった。これは特に、インサイドキックをゲーム中に用いる子どもが固定化していた



ことが推察された。

- 2) 「ダイレクトパス率」は、ゲーム中のパスの総数に占めるダイレクトパスの割合であるが、単元後半、およそ30%台で推移し、大きな変化はみられなかった。ここには単元後半、フェイントによってラインディフェンスを突破しようとするプレイがみられるようになったため、ダイレクトパスでディフェンスを振り切る頻度が落ちた可能性が推察された。
- 3) 「縦パス」については、意思決定と技能ともに良好な場合を◎、意思決定のみ良好な場合を○で示した。図のように両者ともに良好なパスの漸増傾向が認められ、単元終末にはおよそ60%を示した。これらのデータから以下のような指導上の課題が提示できる。①インサイドキック、ダイレクトパスといった技能の有効性を理解させる下位教材の利用、②ゾーン内のパスと縦パスの強弱の違いを強調すること、③体のさばき方といったボールを持たないときの動きの指導を強調すること、④ディフェンスのルール of 徹底や教具としてのボールの大きさを検討し直すこと。

### 4. 主な参考文献

岩田靖, 体育の学習内容の探究, 大修館書店, 2024